朝鮮あさがお

橋本都耶子作品集

橋本都耶子作品集

朝鮮あさがお

橋本都耶子（はしもと・つやこ）
大正7年10月，奈良県に生れる。
奈良県女子師範学校専攻科卒業
現在，奈良市公立中学校勤務
現住所　奈良市浄言寺町15

朝鮮あさがお
一九七七年一一月三〇日　第一刷発行
一九七八年七月一〇日　第三刷発行
著者　橋本都耶子
発行者　伊藤金吾
発行所　北洋社
東京都千代田区富士見二－二－一
電話（二六四）〇五五一　〒一〇二
振替　東京一－一三三二四三
印刷所　豊国印刷
製本所　大製
乱丁・落丁本はおとりかえいたします。
© Tuyako Hashimoto 1977

目次

鬼ヶ峰　七
黒い扇風機　一五
花吹雪　二五
二十六番大吉　三五
鳴川の道　三三
掌の木の実　一三五
朝鮮あさがお　一四九
あとがき　二六八

装丁　山高　登

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

朝鮮あさがお

橋本都耶子作品集

鬼ヶ峰

ハンドバッグは女の城であり、中を覗くとその人のすべてがわかるといわれる。不精者の私など、人前ではめったに開けられない。

端のめくれ上った文庫本に汚い札をはさんで入れてあったり、記憶にない名刺や職員会議のメモ、古い展覧会の案内状にまじって、新劇の切符の半券、薬局のレシート、ちびたデッサン用の鉛筆があったり、広告マッチの一つは底でひしゃげていたりする。香水や化粧品の匂いの代りに、煙草の粉のしみついた私のバッグは、ごみ溜めに似ている。

久しぶりに、そんなバッグをひっくり返して、煙草の粉をはたいた。また正月がくる。私は毎年夏冬の休みには帰郷して、母や兄の家族たちと一緒に過した。母が亡くなってからも、当座は惰性のように帰郷を急がされた。独りでいる私を案じる母の眼は、幾つになっても心に暗い糸を繋いでいたから、今、ようやくそれが吹っ切れた身軽さに、私は一息つく。家からはいつものように帰郷を促してきたが、私は、この冬はもう別にぜひ帰らねばならぬほどの気持もなく、空っぽのハンドバッグを見つめる。

旅をしたい、不意にそう思った。そのまま手廻り品をバッグに詰め込むと、私はあてもなく汽車に乗った。

倉敷の町に降りて、何となく美術館へ足をむける。蔦のからんだ石垣の、寂びた門が近づくにつれ、昔、Nと一緒に来たことがあるのを思い出し、あれはもう十四、五年も前になるだろうかと立ち止まる。九州へ出張するNについてここまで一緒に来たのだ。

あの頃、私ははじめて小さな公募展に自分の絵が並べられたというだけで、何か明るい期待の中にいた。ある美術講座の講師として知り合った十歳近く年上のNは、師匠にも似たつながりで、長く私を支配した。

あの時、私はグレコの「受胎告知」の前にかすかな眼まいを覚え、その肩を彼はわずかに支えた。

私は薄れた記憶の中で、「ここは味はたいしてよくないけど、器が、わりと見られるんだ」と、黒い門構えの旅館に連れられていったのを思い出す。そうして、彼の妻がたたんだであろうハンカチと、自分の靴下を並べて干すことに、あるためらいを感じた一瞬をも——。

あれから一年余り経った夏休み、用心していたはずの私は、黒い帽子を目深にかぶって、少し離れた田舎町の産院を訪わねばならなかった。あのことはNにも秘密のまま、既に私の心の中でさえ、歳月の闇に葬られようとしている。冷たい石の門の陰に、私はしばらく息をつめて立った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だが、美術館に入って、一枚一枚見てゆくうちに、今はかえってそれらの絵にまともに向きあえる、ひとりの自由に心やすらいだ。

夕暮、黒い木組みと白壁の重々しい家並の町を、一しきりぼたん雪に濡れて歩き、創業百五十年を越えるというしもたや風の旅館に宿をとった。

十畳の間の畳は赤茶けてけばだっていたが、六分通り敷いた古い良質の絨緞はひわ色に寂びて柔らかなはずみを伝える。ホーム炬燵が温まるまで茶の間ででもと、下に招じて茶をいれてくれる年配の女中のもてなしも有難かった。

「うちは、美術館見に来やはるお方だけが、お客みたいなもんで——ええ、もう五代も前からの宿ですけど、それも今の代限り——主人は七十過ぎてはりますよって、それに子どもさん無いんですわ。私ら、もう三十年近うお世話になっとります」

私はそのことばに惹かれてつい二晩も泊ってしまい、暮れの二十六日というのに、何をするあてもないひとり暮しの気楽さで、いつか地図で見た鬼ヶ峰温泉へと教えられたバスに乗った。

タクシーの運転手さえ知らないと答えた「鬼ヶ峰」は、多少の不安と、名のとおりの仙境とも思えそうな期待に私をそそった。

倉敷の駅前から出るバスは、年末の買い物客を乗せて満員だった。眼の前に大きな紙包みを携げた女や、広告のゴム風船をかざした子どもたちが重なり、隅の席には盆栽の松を膝に

眼をつぶっている老人もいた。走り出したバスの中で、突然ゴム風船の笛がワーァと鳴り、地方都市の歳末らしいほてりが私をいっそう旅人にした。

小刻みに停車する町の辻々で客はしだいに減ってゆき、やっと外が見えるようになった時、バスは田圃の中を走っていた。ときどき粉雪がちらついたり薄陽が射したりするほどの日和であった。

「やかげの駅で乗り換えるんです」

と、宿の女も、駅の窓口でも念をおしてくれたのを思い、聞きとりにくい車掌の呼び声が不安になってきた。

「やかげ」という名は「矢影」か、「家影」？　それとも「矢鹿毛」かしら。私は乏しい字を拾いながら、窓に額をくっつけてバス停の標識をのがすまいとした。

車は時に小さな川を渡り、林を過ぎして、凸凹の道を走りつづけ、まばらになった乗客は、馴れきった心安さで身をまかせている。

「あのう、鬼ヶ峰という温泉へ行きたいのですが」

私はよろけながら立っていって車掌に訊いた。

「温泉？」

車掌はちょっと不思議そうな顔をしたが、「やかげ」は必ず止るから、そこで乗り換えてくださいと事務的に答えた。

やがてまた人家が見え出し、矢掛石材などと大きな看板のある道端に、やや茶色っぽい切り石が幾つも積み重ねてあったりした。町とも村ともつかない家並のあちこちに、石材は乱雑に横たえられ、このあたりはその産地と見えた。家並の切れた所で、バスは小山に突き当りそうに走ったが、ふいに直角にハンドルを切って坂を下り、暗いトタン屋根の下に突っ込むようにして止った。

そこに二台並んでいるバスの古びた方を指して、車掌は乗り換えるように言い、運転手と一緒に降りていった。

乗り通して来たのは私ひとりだった。「矢掛営業所」とすすびた標札のかかった粗末なガラス戸を覗くと、黒い服の男が二、三人煉炭火鉢を囲んでいた。「やかげ」は「矢掛」だったのか。私は石材の看板を思い返しながら、肩すかしを喰ったおかしさと、ひどく遠くに来たような頼りなさで、底冷えのする土に降りたつ。

空はいつのまにか低く曇っていた。

「これ、鬼ヶ峰へ行きますか」

古びたバスの前の席で、うずくまるようにして漫画を見ていた車掌が、顔をあげた。目深にかぶった帽子の下の童顔は、私が教室で教えている中学生よりも幼く見える。彼は方言で鬼ヶ峰温泉前でバスが止ると教えた。

「旅館、何軒もあるの？」

驚いたようにいやいやをして、「峠の上だがやい」と言った。
「お客さん、たくさん行かはる？」
「あの停留所は、一日に誰も降りん」
怒ったように語尾をあげて窓の外を見つめる。外は再び雪が舞い出していた。
「名前だけは聞いとりますけど。まあ、松茸狩のしゅんに、お湯につかって帰るくらいで、温泉いいましてもなあ」
倉敷の宿の女が口ごもるように言った時も、私はあまり人の混まない所が好きだからと答えて来たのだが、ここまで来るとさすがに心細かった。
人気のない車内はうそ寒く、私は足先の冷えを紛らすように煙草に火をつける。喫い終った頃、運転手が白い手袋をはめながら入って来て車掌に何か囁いた。どうやら誰かを待つようすで、運転台に坐ったまま彼は何度も腕時計をのぞく。もう仕方がないというふうにハンドルに手をかけた時、
「すまん、すまん、遅うなって」
と、紙包みのはみ出た大ぶろしきを両手に、中年の女が二人息をはずませて駆けこんだ。荷物ごと体を投げ出すように坐った時、バスは揺れ、「皆さまお待ちどうでした」教えられたとおり精いっぱい張りあげる幼い声が私を微笑ませる。
バスはいっこうに止るふうもなく雑木林の下道を登って行く。粉雪を刷いた道は、白くか

すれて山裾に延びる。
「おまえ、正月はいつ休みや」
運転手が車掌に話しかける。
「休まん」
「ふうん、そんなら暮れに休みとんのか」
「いいや、暮れも休まん」
「がめつう稼ぎよるのう」
「代ってくれ言われたで、六日まで休まん」
当然のことのように肩を張って答えるのが、何とも潔くいじらしかった。
「おまえにおしつけやがったな、あいつ」
運転手は舌打ちするような調子で言い、
「ほな、母ぁやんと一緒に正月できんのう」
と、いたわりの眼をくれる。
「七草に帰れるからええ」
彼はきっぱり言って、真直ぐ車の前方を見つめる。少年を待っているであろう母親は、こんなバスさえも通わない辺鄙な山家にいるのだろうか。私は、もう郷里の山に帰っても、待っていてくれる母はいないのだと、思いがけない実感に迫られる。

峠の下の部落で女たちが降り、手を振っている子どもを道端に残したまま、バスは次第に急勾配を上る。カーブ毎に几帳面に鳴らす警笛だけが枯山に響いて寒い。やっと頂上を越えたかと思われる頃、

「次は鬼ヶ峰温泉前」

車掌はふいに立ち上って、私一人のために声を張りあげた。

「坂を降りて、橋を渡ると温泉です」

運転手は親切に指さしてくれ、立ちあがると眼の下に小さな谷川が光った。

赤い旗をたてたうどん屋の前でバスを降り、私はまだ揺れているような体を冬枯れの道においたまま、しばらくぼんやりする。谷に面した道の片側は、古木の桜が数本、黒い枝を網のようにひろげて張り出している。しかし、見おろす谷あいに家らしいものは見えず、褐色を帯びた向いの杉山に、粉雪がまばらに吹き散っている。「名勝、鬼ヶ峰」桜の根もとにやや歪んで立つ碑は、鋭く深い彫りを残して黝ずんでいた。

道とも畠の縁の岩ともつかぬ坂を下ると、うどん屋の裏手にあたる場所に、ちょっと風情のある低い土橋があり、その向うの山裾に、思いがけなく青い屋根が大きく見えた。それは山里には不似合いであったが、川原の枯れ蘆が桁にかかるほど伸びた橋を渡りきると、そのまま庭先になっていて、大きな楓の根もとに、残りの菊が素枯れていた。

「鬼ヶ峰温泉」と、銅板にたたき彫りにした細長い看板が鈍く蒼さびて、二階建の間口の広

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com